
時を超えたプレゼント

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

時を超えたプレゼント

【Nコード】

N0618D

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

クリスマスイヴの地下鉄駅。歌手を夢見る青年フィンは、今日もギターを抱えて歌っていた。だが、通り過ぎる人々は誰もフィンの歌に耳を傾けない。恋人と別れたばかりのフィンの心は、クリスマスなのにすさんでいた。そんなフィンの目の前に一人の不思議な少年が現れる……。

前編（前書き）

ギフト企画参加作品です！ 「ギフト企画」で検索すると、他の先
生方々の素敵な作品が読めます！

時を超えたプレゼント

クリスマススイヴの夕暮れの街。

大通りのあちこちのショウウィンドウは、クリスマスの煌びやかな飾り付けがなされ、街路樹は華やかなイルミネーションの光に輝いていた。広場の巨大なクリスマスツリーは、美しい姿を誇らしそうにそびえ立っていた。空気は冷たく澄み、北風に乗って、時折空から雪が舞い降りてくる。道行く人々はコートの襟を立て、足早に家路へと急いでいる。吹き付ける風がどんなに冷たくとも、皆、顔には笑みを浮かべている。抱えきれないほどのプレゼントの荷物を持ち、心には溢れそうなくらいの愛を詰めて……。

世界中が幸せになる、一年中で一番平和な日。

しかし、地下鉄の駅の通路の片隅で、一人ギターをつま弾き歌っている青年の心は沈んでいた。彼の名前はフィン。歌手を夢見て、クリスマススイヴの今日も歌っている。彼の前を大勢の人々が行き来しているが、立ち止まって彼の歌を聴いて行く人など一人もいない。フィンの前に置かれた丸い缶に、コインを投げていく人もない。皆、今夜の楽しいクリスマススイヴのひとつのことを思い、彼の姿など視界に入っていないようだ。フィンはいつもより声を張り上げ、力強くギターを弾くが、彼の声は駅に出入りする電車の騒音にかき消されてしまう。

今年是最悪のクリスマスだ。

やや投げやりに歌を歌いながら、フィンは思う。大学に入学したばかりの頃から付き合い始め、ずっと共に暮らして来た恋人のアンと昨日別れたばかりだった。

「私ね、就職決まったの。クリスマスは家族と過ごすわ。フィンもバイトしながら歌手を夢見るなんてやめて、もっと現実に目を向けた方がいいと思う」

彼女はそう言い残して、アパートを出ていった。近くにいればい

るほど、彼女との心の距離は離れて行ったように思う。大学を卒業しても、アルバイトとストリートを続けるフィンに、彼女は愛想を尽かしたのかもしれない。

現実にも目を向ける。

ただのストリートミュージシャンで一生を終えてしまうのか……その不安はフィン自身にもあった。二人で過ごすクリスマスはなくなり、彼女に買っていたクリスマスプレゼントは、今朝路頭に捨てて来たばかりだ。

時間が経つにつれ、地下鉄駅を行き来する人々の数は減ってきた。今何時なのか、外の景色はどうなのか、地下にこもっているフィンには分からない。だが、時々通路に入り込んでくる冷たい風、通り過ぎていく人々のコートにうつすらと積もっている粉雪を見て、外の景色は想像できた。

どうやら、ロマンチックなホワイトクリスマスになりそうだ。

十二時の最終電車が出発して、駅の中から人通りが消えた。缶の中味はコインがほんの数枚。静まりかえった構内で、フィンはギターの演奏をやめ、丸い缶を持ち上げた。

コインが虚しく、カランと音を立てる。

「落とし物だよ」

不意に間近で子供の声が出た。真夜中過ぎの地下鉄駅に子供？しかも、今日はクリスマス……。不思議に思っ、フィンは顔を上げる。そこには十才くらいの小さな少年が立っていた。茶色いコートにグレーのスボン、首には手編みのマフラー、手には手編みの手袋。完全防備の姿をしているが、金茶色のくせ毛の上には帽子がなかった。マフラーも手袋も同じ雪の結晶柄の手編みだ。どうせなら帽子も編めばいいのにと、フィンは思う。

それにしても、少年の格好は何となく違和感がある。昔風というか、今時の子供のスタイルじゃなかった。

「何、ぼーっとしてるんだ？ これ、君のだろ？」

「あ、それは……」

少年の生意気な喋りにカチンとくるのも忘れるくらい、フィンには驚いた。少年が差し出していた物、それはフィンが彼女のクリスマスプレゼントに買った木彫りのブレスレットだった。高価なアクセサリーを買う余裕はなかったが、フィンは何か彼女が喜びそうな物をプレゼントしたかった。街中探し回って、ようやく買った木彫りのブレスレット。

だが、それを渡す相手はもういない。

「道路に落ちてたよ。もうちょっとで雪に埋もれそうになってた」
「……」

フィンは少し乱暴に少年からブレスレットを受け取った。

「いいんだよ、拾わなくても。いらなくなったから捨てたんだ」
吐き捨てるように言うフィン。少年は睨み付ける。

「何てこと言うんだよ。こんな綺麗なブレスレットなのに！ 君はこのブレスレットを作った人の気持ちが分からないのか？」

こんな小さな子供に説教されるとは。フィンは怒るより情けない気持ちになる。確かにブレスレットには何の罪もない。フィンは改めてブレスレットに目をやる。よく見ると、木彫りの模様は雪の結晶の形をしている。少年のマフラーの柄と同じような形だ。

「それより、何でこれが俺のブレスレットだって分かったんだ？」

フィンは少年の顔とブレスレットを交互に見つめる。おかしな子供だ。こんな真夜中に一人で歩きまわっていることも普通じゃない。今日はクリスマススイヴだと言うのに。

不思議そうに見つめるフィンの顔を凝視しながら、少年はクスクスと笑う。

「そろそろ、ここは出た方がよいよ。君、閉じこめられてもいいのかい？ クリスマスイヴだったのに、地下鉄駅で一晩過ごすなんてさ」

生意気なガキだ。フィンはムツとするが、少年の言うとおり、もうすぐ構内はシャッターがおろされ外に出られなくなってしまふ。

フィンは軽くため息をもらすと、ブレスレットをジーンズのポケットにしまい、ギターとコインの入った缶を抱え、無言で歩き始める。少年もフィンの後をついてきた。

地下を出ると、そこは雪化粧した銀世界だった。細かい雪が次から次へと空から落ちてくる。凍り付きそうなくらいの冷たい空気。暗い夜空。けれど、通りの木々の明るいイルミネーションや広場の巨大なクリスマスツリーの輝きに照らされ、深夜の街は温かい雰囲気にも包まれている。なんとと言っても、今夜は愛に満ちたクリスマスイブだから……。

「いつまでついて来る気だ？ まさか、クリスマスイブに家出でもしたのか？」

広場のツリーの前でフィンは立ち止まり、後ろを振り向く。フィンの後を静かについてきた少年は、口元を弛めた。

「そう見える？」

「いや……」

フィンは首を横に振る。

「お前は手ぶらだし、第一、家出少年のような暗い顔をしていない。家は近所なのか？」

「君に頼みがあるんだ」

フィンの質問には答えず、少年はニコリと微笑む。

「プレゼントを届けて欲しいんだよ」

「プレゼントだって？」

「今日はクリスマスイブだろ？ ああ、もう十二時をまわったからクリスマスだね」

「見ず知らずの俺にサンタの代わりにしろっていつのか？」

フィンは鼻で笑う。

「自分で渡せばいいだろ。子供は家で寝ている時間だ。良い子はベッドの中でサンタクローズを待っているんじゃないのか？」

「子供ならね。まあ、いいじゃないかい。クリスマスは誰もが優しい気持ちになれるはずだよ。人助けも悪くないと思うけど」

少年に簡単に切りかえされ、フィン言葉に詰まる。

「僕は君に、落とし物を届けてあげた。代わりに君は僕のプレゼントを届けておくれよ」

生意気な奴だ。俺を完全に子供扱いしやがって。

フィンはまたカチンとくるが、フィンが言い返す前に、少年はどこに持っていたのか、今度はフィンに毛糸の帽子を差し出した。

「これが、プレゼントだって……？」

少年が差し出したのは、薄汚れた手編みの帽子だ。少年の帽子にしても汚れてよれよれになっている。

「こんな汚い帽子を、誰にやるっていうんだ？ しかも、ラッピングさえしないで」

「いいから、いいから。この帽子は君のブレスレットよりずっと価値のあるプレゼントさ」

少年はクスリと笑った。

「これをホーリーっていう子に届けて欲しい。住所は」

少年はフィンの返事も待たずに、スラスラと住所を伝える。ここからなら歩いて行ける距離だった。

「いいかい、間違わずにホーリーに届けるんだよ。彼女は長いことこの帽子を探しているはずさ」

なかば強引に少年はフィンに帽子を手渡す。

「なんだよ、そのホーリーっていうのはお前の彼女なのか？ だったら、もっとましなプレゼントにすりゃいいのに。こんなの贈れば余計に嫌われるぞ」

フィンは帽子を見つめる。小さな赤と白の縞模様の帽子。元は鮮やかな赤だったのだろうがその色はあせ、白い部分も黄ばんでいる。それに、雪のせいか帽子は濡れたようにしめっていた。

「で、お前の名前は？」

フィンは帽子から視線を上げて聞いた。しかし、すぐ側にいたは

ずの少年の姿はなかった。

「……………」

キヨロキヨロと辺りを見回したが、彼の姿はどこにも見あたらない。広場にはクリスマスツリーがそびえ立ち、粉雪が舞い降りている。

「何だ？ 俺をからかっているのか？」

フィンはその辺を歩き少年の姿を探したが、どこにも見つからなかった。うつすらと通りに積もった雪にフィンの足跡がついていく。

「あれ……………」

フィンは足元を見て不思議に思う。雪の積もった広場には、無数にフィンの足跡がついていたが、どこを見渡してもフィンの足跡だけだった。ピツタリとフィンの後をついて来た少年の小さな足跡は、全く残っていないかった。

しかし、フィンの片手には少年が渡した赤い帽子が確かにあるし、ジーンズのポケットには捨てたはずのブレスレットも入っていた。

「クリスマスプレゼントか……………」

不思議な感じがしたが、このままアパートに戻って一人寂しくクリスマスを迎える気にもならず、フィンは少年の頼みをきいてみようと思った。

「クリスマスには奇跡が起きるって言うし、一回だけのサンタクロースになってみるか」

フィンはフツと笑い、シンシンと雪の降る深夜の街を歩き始めた。

薄く積もった雪を踏みしめるたびに、キュッキュと小さく音がする。道路を覆った白い道の上に、フィンのスニーカーの靴跡が残されていく。

少年が教えた住所は、クリスマスツリーの広場から歩いて二十分程の小さな裏通りの一角の家だった。表通りの華やかさに比べ、ひっそりと寝静まった住宅街の雰囲気がある。昔風の煉瓦造りの壁、淡い緑色のドアにクリスマスリースが飾られている。そこがホーリーという少女の家だった。初めて来た場所なのに、フィンは一目見てそこがホーリーの家だと分かった。玄関先に備え付けてある郵便受けには、少年が言ったのと同じ住所が書かれてあった。

「ホーリー・ロリス」

郵便受けに書かれている名前を、フィンは口に出して読んでみる。名字は聞かなかったのによく分かったものと、フィンは今更ながら自分で感心した。それと同時に、書かれている名前が少女一人の名前だと言うことを疑問に感じる。

もしかしてホーリーというのは年上の大人の女なのか？ いや、それならこんな赤い帽子なんか……それに、彼奴は、ホーリーって子に、とか言ってたし……。

首を捻りながらも、フィンはドアのチャイムを鳴らす。二、三度慣らして、しばらく待ったみだが、中から人が出てくる気配はなかった。家の電気は消えたままだ。

「こんな夜中に起きてはないか……」

フィンは帽子を郵便受けの中に入れようとした。と、その時、真つ暗だった家の窓に灯りが灯る。そして、ガチャガチャと鍵を開ける音がした後、リースが小さく揺れ緑色のドアがゆっくりと内側に開いた。

「……………」

お互いの顔を見合わせ、しばらく沈黙が続く。
フィンが想像していたホーリーは、あの少年と同一年くらいの若い少女だった。

「……あの、ホーリー・ロリスさんは……？」

おずおずしながら、フィンは口を開いた。

「ホーリー・ロリスは私ですよ」

彼女はにっこりと微笑みかける。顔中しわだらけにして、メガネの奥の目を細め、嬉しそうにフィンを見上げる。ホーリーは八十は超えていそうな老婆だった。

「あら、その帽子は……」

言葉を失って突っ立っているフィンが手にしている帽子に気付き、ホーリーは目を丸くする。

「もしかして、イネスに頼まれたのですか？」

「イネス……？」

「小さな男の子です。多分、雪の結晶の柄のマフラーと手袋をしていたはず……さっき、イネスの夢を見たばかりなのですよ」

口をポカンと開けたまま、フィンはホーリーの言うことを聞いていた。どうやらさっきの少年の名前はイネスのようだ。ホーリーは彼の服装まで言い当てた。自分は夢でも見ているのだろうか？ 不思議なことばかり起きる。

冷たい風が吹いてきて、粉雪が開いたドアから家の中に入り込んできた。

「さあ、さあ、中に入って暖まりなさい。ココアでも飲みながらお話ししましょう」

優しい目をして、ホーリーはフィンを招き入れる。年をとり少し腰も曲がっていたが、彼女はレディのような品があった。

「あなた、お名前は？」

ゆっくりとした足取りで歩きながら、ホーリーはフィンにたずねる。

「あ……フィンです」

フィンは誘われるまま、家の中に入って行く。暖房のよく効いた温かい家。氷のように冷たくなっていたフィンの体は、次第にほかほかと暖まっていくな。

「さあ、どうぞ」

ホーリーはテーブルの上にココアの入ったカップを二つ置いた。カップからは白い湯気がたっている。暖炉のある部屋に案内され、フィンはふかふかのソファに腰掛けていた。

「ありがとうございます」

ホーリーはフィンに微笑みかけると、ゆっくりとした動作で、向かいのソファに腰を下ろした。フィンは陶器のカップに口をつける。温かく甘いココアが、フィンの喉元を通り過ぎる。

「フィン、あなたはイネスに会ったのですね？」

暖炉の火とココアの暖かさで緊張の弛んだフィンに、ホーリーはたずねた。

「え？ ええ、ちょうどさっき小さな男の子に、この帽子を届けて欲しいと頼まれて……」

テーブルの上に置いた小さな縞模様の帽子にフィンは目を落とす。「そうですか……イネスは元氣そうでしたか？」

ホーリーは両手で包み込むようにカップを持ち、フーと息を吹きかけた。その時ホーリーのガウンの裾がめくれて、手首にしているブレスレットがフィンの目に入った。それは、フィンが彼女に買った木彫りのブレスレットと同じ柄をしていた。

「あの……そのブレスレットは？」

「フィンは思わずホーリーにたずねた。

「ああ、これ。昔、私がデザインして作ったものなんですよ」

ホーリーは穏やかに笑った。

「木彫りのアクセサリを作る仕事をしていたのです。もう、随分前のことになりますけれどねえ。雪の結晶の柄が大好きなんです」

「雪の結晶柄……」

フィンは自分が捨てたブレスレットのことを思う。そう言えば、イネスという少年も雪の模様のマフラーと手袋をしていた。

「イネスという男の子とあなたはどっいった関係なんですか？」

フィンは顔を上げ、ホーリーを見る。

「あつ……」

ホーリーが座っているソファの向こうの棚に目がいったフィンは、そこに飾ってあるフォトスタンドの写真を見て驚いた。セピア色をしたかなり古い写真。小さな男の子と女の子が並んで立っていた。楽しそうに笑いながら、手を繋いで寄り添うように立っていた。

男の子はさっきの少年、イネスだ。ほんの少し前に会った時と同じ格好で写っている。茶色いコート、グレーのズボン、雪の結晶模様のマフラー、さっきは被っていなかったが、マフラーや手袋と同じ柄の帽子も被っていた。

「イネスの写真ですよ」

フィンの視線の先をたどり、ホーリーは振り向いて言った。

「隣りに写っている女の子は私です」

「えっ……！？」

「あのクリスマスの日朝に撮った写真です。私はこの帽子を被っているでしょう」

啞然としているフィンに、ホーリーは優しく微笑みながら 答えた。

「けど、あなたはまだほんの子供……僕はさっきイネスに会ったんですよ？」

フィンはまじまじと写真を見つめた。年老いたホーリーがおかしなことを言っているとも思えない。確かに写真の女の子はホーリーの面影を残し、頭にはテーブルの上にある縞模様の帽子を被っている。

「神様がクリスマスの日にフィンを地上に降ろしてくれたのですね……」

ホーリーは遠い目をして微笑む。その瞳は子供の頃と同じようにキラキラと輝いていた。

「じゃ、イネスは……彼はもうこの世にはいないと」

「イネスは永遠に子供のままですよ。イネスは私の大切な友達でした……」

ホーリーはココアのカップをテーブルに置くと、ゆっくりと立ち上がった。

「今日はクリスマス。私もイネスに届けてもらいたいものがあります」

「え？ けど、もう彼は」

イネスは姿を消してしまった。また現れるかどうか分からない。だが、ホーリーは嬉しそうに微笑みながら、奥の部屋へと歩いて行った。

「これを……これをイネスに届けて欲しいんです」

ゆっくりと戻って来たホーリーは、緩慢な動作でテーブルの上に何かを置いた。

「これは……」

フィンはいり入るように、ホーリーの帽子の隣りに置かれた物を見つめた。

それは手編みの帽子だった。ちょうどホーリーの帽子と同じくらいの小さな帽子。白い毛糸に雪の結晶の柄、帽子の先には赤いぼんぼんがついている。かつては真っ白だったであろう帽子は、すっかりくすんで色あせている。

「雪の結晶柄の帽子……」

「イネスの帽子でした」

ホーリーはヨイショとかけ声をかけ、もう一度ソファに腰を下ろした。

「イネスが私に貸してくれたんですよ。私の帽子が風で飛んで湖に落ちてしまったものですから……イネスは優しい子でした」

ホーリーはまた昔を懐かしむように遠い目をする。微笑んでいるような悲しんでいるような瞳をして、瞬きを繰り返す。

「イネスは氷の張った湖まで降りて、私の帽子を探しに行ってくれました。直ぐに帽子を見つけてくれて、私に手を振って合図してくれたのですが……湖に張った氷が割れて、イネスは湖の底に落ちてしまったんです」

「……」

フィン目は伏せる。

「直ぐに助けを呼びに行ったのですが……イネスの遺体も私の帽子も見つかりませんでした。でも、イネスはずっと私の帽子を持っていてくれたのですね」

ホーリーは頬にこぼれ落ちた涙を拭い微笑んだ。

「私もずっと、イネスの帽子を大切に持っていました。こうして、イネスに届けてもらえることが出来て良かったです。今まで帽子がなくて、頭が寒かったでしょうから」

ホーリーは笑顔で言うと、テーブルの上に二つ並んだ帽子を愛おしそうに眺めた。

「イネスに届けてくれますか？ 今日にはクリスマスですから」

「あ、ええ……」

フィンは曖昧に頷いた。年老いたホーリーが、幼子のようなキラキラした瞳をしてフィンを見つめている。何十年も大切に持っていた幼なじみの帽子。ホーリーの頼みを断ることは出来なかった。フィン自身も、もう一度イネスに会ってみたいと思った。

イネスはフィンの元に現れてくれるだろうか？ クリスマスの奇跡は、また起こってくれるだろうか……？

もう一度、サンタクロースになってみるか

ホーリーに手渡されたイネスの帽子を持ち、フィンは夜明けの近いクリスマスの街へ再び戻って行った。

時を超えたプレゼント

後編

広場の巨大なクリスマスツリーの前で、フィンはイネスが現れるのを待った。いつの間にか雪はかなり降り積もり、クリスマスツリーやイルミネーションされた木々も白く覆われていた。

夜明け前に戻って来い。俺はちゃんとプレゼントを届けたんだからな。

かじかんだ両手に息を吹きかけて、フィンはギターを肩にかけた。人気のない雪の広場で、ギターをつま弾きフィンは歌い始めた。寒さで声が震えそうだった。降りしきる雪に負けないように声を張り上げる。

「そんなとこに立っていたら、雪だるまになるよ」

何曲か歌ったところで、澄んだ少年の声があった。声のする方を向くと、そこには笑顔のイネスが立っていた。

「それにしても、君が歌う歌は騒々しい歌ばかりだな」

イネスの元気な姿を見て、フィンはホッと安心して笑った。雪は降り続けているのに、イネスの体には全く雪が積もっていない。帽子は被ってないが寒くはなさそうだった。

「どうやら、プレゼントは届けてくれたようだね」

イネスはフィンの側にスツと近づく。

「ああ、ホーリーは喜んでいたぜ。それから、お前にもプレゼントがある」

フィンはホーリーに預かったイネスの帽子を差し出す。

「メリークリスマス、イネス。ホーリーからの届け物」

雪の結晶柄の帽子を目にしたイネスは、パツと顔をほころばせる。

「ホーリーは持っていてくれたんだね！　ありがとう」

イネスはフィンから帽子を受け取ると、さっそく頭に被る。帽子の先についている丸いぼんぼんが弾んで揺れる。

「今日はクリスマス。騒々しい歌はやめて、クリスマスの歌を歌い

なよ」

「クリスマスソングか……『きよしこの夜』くらいなら、お前も知
っているのかな？」

フィンはフツと笑って、静かにギターをつま弾き始める。

「その前に一つ聞いていいか？」

「何だい？」

「お前は何歳なんだ？」

「うーん、覚えてないな」

イネスは頭を傾げる。

「ホーリーより一つ年上だったけど」

「へえ……」

クリスマスの奇跡。フィンはこの年のクリスマスを生涯忘れない
だろうと思った。やけになりふてくされた気分だったのが、真っ白
な雪に清められたかのように穏やかになった。降りしきる雪の中、
フィンは『きよしこの夜』を歌う。イネスは微笑みながら、フィ
ンの歌を聴いていた。

メリークリスマス、フィン。今年のクリスマスは最高だった。

ようやくプレゼントを届けてもらえる人に巡り会えたから……。君
にも僕からクリスマスプレゼントを贈ってあげるよ。

イヴの夜が終わりを告げ、クリスマスの朝が開けた頃、イネスは
雪の中に消えていった。

冷凍庫の中で体中が凍り付いたみたいだ。アパートに帰って温
かいお風呂にでも入って寝るか。

夜が明けて、降り続けていた雪は止んだ。眩しい朝日が広場にも
射し込んできて、クリスマスツリーの雪が反射する。人気のなかつ
た広場にも、チラホラと人々の姿が現れ始めた。

フィンが歌うのを止め、ギターをはずしていると、サクサクと雪
を踏みしめる足音が聞こえ、フィンのちょうど前で誰かが立ち止ま

った。長いコートに身を包み大きな鞆を提げた一人の女性。

「アン……」

フィン は驚いて彼女を見つめる。別れたばかりの恋人のアンだ。彼女は瞳を潤ませながら、じっとフィンを見ていた。

「家に帰ったんじゃないのかい？」

「ごめんなさい……酷いこと言つて、私のこと許してくれる……？」

アンの瞳から涙が零れる。フィンは口元を弛めて頷いた。

「フィンのことが好き。私、歌っているフィンが一番好き」

アンはフィンの元に走り寄り、フィンの胸の中に飛び込んでいく。フィンはしっかりと彼女を抱きとめた。

「おかえり、アン。一緒にアパートに帰ろうか」

フィンの胸の中でアンは頷いた。フィンは彼女の頭にキスする。

「そうだ……君にプレゼントがあるんだ」

フィンはポケットの中に入れていた、木彫りのブレスレットを取り出す。雪の結晶柄のブレスレット。クリスマスの奇跡は、このブレスレットから始まった気がする。

フィンはアンの腕にブレスレットをはめた。

「素敵なブレスレットね」

アンは顔をあげ、ブレスレットを見つめた。

「この先、何十年も君がこのブレスレットを大切に持っていてくれたら嬉しいな」

二人は微笑みながら見つめ合い、しっかりと抱きしめあった。

純白の雪が日の光を浴びて、キラキラと光り輝いている。愛に溢れたクリスマスの平和な朝が、静かに始まる……。

了

時を超えたプレゼント

後編（後書き）

忙しくなるのを予想して、十月には書いていた作品です。^^；
「ギフト」企画だから、プレゼントをテーマにした作品じゃなきゃいけないのかな？ と思ってましたが、作品が読者の方々への「ギフト」ということだったようですね。^^； クリスマスまでにはまだ一ヶ月以上ありますが、一足早くクリスマス気分に乗っていただけたらと思います。

この作品の番外編？ というか、ホーリーとイネスの幼い頃の思い出を書いた「雪の結晶」も読んでもらえると思います。（^^）
皆さんに、素晴らしいクリスマスが訪れますように……。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618d/>

時を超えたプレゼント

2008年11月7日06時41分発行